

古本屋の戦後

古本屋の中で

五月、五十八年。

四代 荻部正 昭和三十六年五月より現在。「天保堂」の看板は九十五年、生き続けている。

荻部 正

序

私の古本屋は語るほどのものはない。「天保堂」の軌道の上に乘って走って来たに過ぎない。機関車があまりにも大きかったので連結器が切れないようにと走りつづける。

創業者、天保堂篠田亮一は明治十四年、信州飯田の生れ。そのスタートは『東京古書組合五十年史』に、日本橋通三丁目の「後凋閣」とある。

明治三十三年創業。

その営業地は、明治四十年版『全国古書名簿』に神田区裏神保町、又、『神田書籍商同志会史』(昭和十二年刊)に、同志会発足時明治四十三年に通神保町とある。

横浜野毛坂の現在地には大正五年春に移店。昭和十七年十月十七日没。

その後、未亡人かねは昭和二十三年三月疎開閉店まで。

三代 荻部洋吉 昭和二十一年

この六月の初め、私は旧制中学時代からの友人に誘われて、山陽路をその仲間達と廻った。出発予定が仲間の一人の都合で丁度一週間遅れた。その日程の後半の一日、周防灘沿いを山陽本線で西へ。

その車中で、私は仲間のFに「小郡駅」の話をした。

丁度、九十年前のこの日――

若い古本屋三人が九州までセドリに行く。その三人は、巖松堂波多野重太郎(3)氏、玉英堂齊藤英一郎(2)氏、天保堂篠田亮一(2)である。

――各々、四百円の金を拵える

のですが、巖松堂さんもその金を工面するのに仲々困難なようでした。それで品物を賣つて捻出することになり、私も品を市へ出す手伝に行きました。夜汽車、夜汽車とかけに行きました。岡山から広島、山口と廻つて九州まで行きましたが九州では東京から洋本を買ひに来たのは始めてだと大歓迎を受けました。(中略)

帰京して松本亭で市をして大変な出来高だと褒められました。私

が洋書の係、篠田が原書、巖松堂さんが洋本という分擔で私が二、三歳の時でした。

―― 齊藤英一郎氏 (秋の宵 第一支部古老座談会より)

――そうそう、日本海大海戦を小郡の駅前の交番の掲示で知ったのを覚えてゐるから三十八年(一九〇五)の五月です。

―― 波多野重太郎氏 (巖松堂の歴史を語るより) 後年、その戦勝を祝つて海軍記念日とされたのが、五月二十七日。(筆者注)

以上の話は私が『神奈川古書組合三十五年史』(一九九二年十月刊)に東京組合機関誌『古書月報』にお世話になつて書き写した天保堂の草創期の部分である。

遠い昔の話ではあるが、私の今回の旅の当初の日程だと奇しくもこの五月二十七日に「小郡駅」通過と云う偶然が、私の幼年期の天保堂篠田亮一への忘れられぬ温もりとして、車窓の外にその面影を追ひ求めていたのだった。爺さんは戦勝気分をいだきながらの中で、車窓の景色をどんな気持ちで見

ていたのだろうか？

その風景は九十年の隔たりはあるだろうが駅前のその交番こそ違え、見渡せる山々の爽やかな樹木の緑は変りないものと思う。

只、この九州セドリ旅の話は私

は読んでそのスケールの大きさと根性を痛感していた。

年号が改つて大正二年。二月二十日、神田の大火が街を一変する。その七月二十九日、神田高等女学校教頭の岩波茂雄が教職を辞して古本屋としてのスタートをする。

この時、篠田は弟之森と本郷志久本亭の「九の日の市」に岩波と同道する。市での荷を大八車に積んで三人は帰つて来る。そして開店する古本屋「岩波書店」の看板を篠田は岩波に頼まれてその店先で書いたと云う。

この話は私が、婆さんに何度も聞かされていた話である。

その書は筆書き山帳時代の数少い達筆であつたと云われ、永坂石埭(筆者は『古書月報』に石泰と記されていて、前述「神奈川古書組合三十五年史」にそのまま誤記している)を学んだもの。

石埭(一八四五―一九二四)は医学大学に奉職し、後、神田松ヶ枝町に診療所を開き、詩を好み、又書を善くした。其の書古厚にして雅致あり、書籍の題簽より、看板にまで至る。(奥山錦洞著『日本書道史』東京清教社 昭和十八年刊)とある。

その石埭流の書の看板がどんな看板であつたかは、今は誰にも分からない。「岩波書店」の看板はその後、安倍能成が漱石に委ねて書かれてゐるが、その看板も関東大

震災で消失している。

この神田の大火のあとの大正五年春、篠田は神田から横浜野毛坂へ転出している。転出の理由は分からないが、古本屋に足を踏み入れた「後凋閣」時代に横浜を見ていたのかも知れない。

新聞の古本買入広告の先駆者として「後凋閣」の主人、小池繪更氏は「横浜貿易新聞」に明治十七年四月と同一二十一年三月の二度、「和漢洋書買入」広告を掲載している。小池氏が横浜に目を向けていた事実が篠田の決断に繋がっていたと思われる。

しかし、その営業の土俵は常に神田にあつた。前記、九州セドリ旅の頃から、松本亭の「七の日の市」同志会前の青志会々長としての松本亭の「二十日の市」、本郷志久本亭(本郷での初市会)「三の日の市」等の会主として二十才台の若さで華々しく活躍していた。

横浜へ移つて、大正十三年九月、関東大震災のあとの復興期に篠田は横浜古書組合設立を呼びかけ、次の年に組合を創立している。

そして昭和に改号されると、松本亭に京浜連合市を開催、その同人と伊勢佐木町有隣堂で展覧会(即売会)を不定期に始め、同十年末に、有隣堂古書部の運営を任せられながら、東京書林常市会、和楽会、第一倶楽部市会(後の東京図書倶楽部交換会)、東京古典会

の会主の一人として神田を往返している。

二

私が爺さんに初めて東京図書倶楽部へ連れられて行ったのは、新しいクラブ(爺さんも婆さんもそう呼んでいた)が出来た九年の秋以後の十、十一年頃、まだ学令期の前の頃だったろう。

淡水色の木造二階建のクラブは右手の玄関から入ると、下足番のオジサンがいて「天保堂さんの坊や、いらつしやい」「二階へ上ると白い割烹着姿のオバサン達が「おいちゃんのお仕事が終わるまでいい子でね」と紙包みにお菓子を一つ二つ持たせてくれたのに想ひ出は始まる。

古本屋の戦場の太広間に山と積まれた本の谷間の片端で、私は誰かが買った映画雑誌「日活」をペラペラ眺めている。

爺さんは山帳の席に坐っているが、誰か仲間と喋っていて、たまに私を覗きにくる。

「もうすぐ終るからね」

市の帰りは必ず浅草へ出て、三定か今半で天井を食べて、雷門の入口の本屋清水で、「大相撲写真番付」、同型の「俳優名鑑」を買って貰って、六区へ廻る。

六区では日活時代劇もの、富士館中心で千恵蔵の遠山の金さんあたりがいつものコース。

爺さんは帰りにわざ／＼一区間

の切符を買って私に渡す。爺さんは櫻木町からの定期券を持っていて、勿論私はタダだから、その切符は大きな木箱に私の宝物として「講談社の絵本」とともに、小さな勉強机にヒミツの箱として鎮座ましまして。

神田のクラブゆきは私の国民学校四年生、爺さんが亡くなった年の春頃まで続く。

三

敗戦後の昭和二十一年五月、天保堂は私の長兄洋吉が復員、大学へ復学してT大在学中に復活する。敗戦後の横浜は駐留軍のカマボコ兵舎から飛行場まで、街全体が接収され、唯一の商域として市と第八軍の政策で、野毛町一帯が日本人用に指定され、青空マーケットと云えば聞こえは良いが、完全なブラックマーケット闇市が設置された。野毛へ来れば金さえあれば食べものはあった。大袈裟に云えば、横浜中の人が物を賣りに、物を買ひに来た。

その中で商品とする本は洋吉の学生時代の蔵書の一部を床下の土中に埋めたもの、防空壕に入れて焼かずに済んだもの、学徒兵としての海軍士官で在任した横須賀の将校用の自室と施設に持込んで残したものの。

間口二間、奥行三間の簡易住宅の入口の土間、一間四方の書棚には勿論、商品は足りない。そこで

仲間へ復員して来た者や大学に残った者に教室で委託販売を呼びかける。一人一人の名前と預かった一冊一冊を大学ノートに書き込み、売上げは月末精算。

竹の子生活の時代で、ロコミで商品としての本は集まるが、本に飢えた客の数の方が何倍も多く、何でも賣れた。

そこで商品を補う方法の一番として、洋吉は岩波書店へ当主雄二郎氏を訪ね、岩波茂雄と篠田天保堂との出逢ひから「岩波書店」の看板の話、雄二郎氏と自分が、T一中の同窓であることを事由に、岩波書店の出版中のものの小売卸を願ひ、私達兄弟三人はその次の日から交替で一ツ橋の岩波書店へ日参した。

そんなある日、リックザックと風呂敷包みを抱えて兄弟で櫻木町駅から店の近くまで来ると、流れている人の群の他に、一列、人の並んでいるのを見て「？」。

この列は闇市の食べ物屋に並んで居る人の列でなく、我が店の入口からの列であった。

「野毛坂の古本屋へ行けば、岩波文庫が買える」

人の口から口へ、驚く速さで喧伝されていた結果は、一ヶ月も経っていないかった。

「昆虫記」や「寺田寅彦随筆集」刊行中、中断してしまった文庫版の支那古代の石鼓文の石摺から取

った装幀の「漱石全集」。

五部か十部しかないこれらの文庫は、それこそ羽が生えた如く、一瞬にして売り切れた。

年が明けると、本拠地を接収されて本牧で仮営業をしていた有隣堂が野毛に店舗を探したいと社長自ら尋ねて来る。

初代天保堂がお世話になった縁で、祖父が焼け跡になった儘の家

作のあと地を倉庫兼従業員宿舎に、県道に面した市電の通る一等地に店舗を紹介し、それから十年有隣堂は野毛へ讀書人を呼び込む。この延長は昭和二十七年九月十二、三名からなる青空マーケット「野毛坂ブックセンター」が、リング箱の上に戸板をのせて、野毛坂に出現する。

しかし、その冬、次の夏、二度目の冬となると、一軒のみの「ブックセンター」になっていた。これは単に暑さ寒さだけでなく、関西のネオ書房チェーンの保証金なしの新刊貸本と云う新方式に飲み込まれたのも一因である。

江川理事長と関西へ調査に行った兄は四ヶ月後に、戦前の天保堂の部分を半分、貸本「かるべ文庫」として併商する。

そして貸本ブームは県単位の組織まで作る勢ひで、テレビ出現まで続く。

四

昭和二十八年、丸山眞男ゼミに在籍し、T大大学院生として在校十年の兄は自動的に卒業し、同時に学生古本屋も卒業した。そして旧制高校時代の恩師、安倍能成先生の「一本会」にのめり込み、先生に書いて戴いた看板「天保堂苅部書店」を店頭にぶら下げると、真正正銘の古本屋になる。

五

私は大学を出ると新聞屋勤めになるが、兄が健康を害し、昭和三十六年春、幼友達が「家に帰れ、家を継ぐべきだ」と野毛の地の一等地(天保堂と百米離れた処)を貸してくれる。まだ世帯も持っていないだったので、何も悩むこともなく、スムーズに私は天保堂の懐に帰る。両親は健在だったので、その友人の店を「第二天保堂苅部書店」として開店。

その時、業界の先輩S氏は、「苅部君はいい、古本屋は二十年修業してはじめて認められるんだって。その点君は古本屋の中で育っているから、その半分で古本屋に成りきれでせう。あの天保堂さんもお墓の下できつと喜ばれるよ」

篠田亮一が鬼籍に入った年令を私は越えて了った。そして自身身の年令の半分以上も古本屋稼業で続けている。

(横浜 天保堂苅部書店)